

平成25年度男女共同参画推進月間講演会 希望格差社会と男女共同参画



日時 平成25年6月15日(土) 13:30～15:30
会場 こうち男女共同参画センター 3階大会議室

中央大学文学部 教授 山田昌弘氏

1981年 東京大学文学部卒。1986年 同大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。
東京学芸大学教授を経て、2008年より中央大文学部教授。
内閣府男女共同参画会議民間議員などを歴任。
専門は家族社会学。愛情やお金を切り口として、家族関係を社会的に読み解く試みを行っている。
著書は『パラサイト・シングルの時代』(ちくま新書)、『希望格差社会』(筑摩書房)、『迷走する家族』(有斐閣)、『少子社会日本』(岩波新書)、『ワーキングプア時代』(文藝春秋)、共著に『婚活時代』『幸福の方程式』など多数。



はじめに

きょうは「希望格差社会と男女共同参画」というお話をさせていただきたいと思っています。

「働くこと」と「愛すること」を人はうまくできるようにはならないと精神分析学者フロイトは言いました。しかし21世紀の日本社会を見ると、非正規雇用だとか結婚したくてもできないなど、そういう若者がどんどん増えています。若者の間で働くこととか愛することというのがなかなかうまくできなくなっているのはなぜか、どういうふうにできるのかというのを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

20年を振り返ると

私は学生に昔の家族の様子を伝えるときに、映画を見せます。戦後すぐの家族はこうだった、結婚はこうだったというときに小津安二郎の映画を見せるんです。「晩春」という映画を見た方もいらっしゃるかもしれませんが。笠智衆さんが父親役を、原節子さんが娘役です。なかなか結婚しない娘を父親が心配しているシーンがありました。27歳で結婚していない娘に周りから「行き遅れ」などという言葉が映画の中で飛び交うわけです。学校の同級生はみんな結婚しているのに彼女だけが結婚してない。父親は娘がなかなか結婚しないのを心配して、「もうお父さん57歳だ。もう先がない。だから、あんた早く結婚しなきゃ

いけないんだよ」というふうに説得する場面があります。男性の平均寿命が60歳を超えたのは昭和30年代です。今からせいぜい50年前なんです。そういう時代を過ぎて、だんだんと親元にとどまりながら生活を楽しむ若者が増えてきたという変化を見てきて「パラサイト・シングル」という言葉を作りました。

昔のことが今でも通用するとはなかなか言えなくなってきました。今から20～30年前だと、学校を卒業すれば正社員の仕事があるのは当たり前でした。しかし今は、15歳～24歳までの非正規雇用率は男性42%、女性52%。もちろん学生は除いていますが、働いてる若い人の半分ぐらいは正社員ではない時代になったんです。

結婚もそうです。2010年の国勢調査で30代前半の未婚率、結婚していない人の割合は男性47.3%、女性34.5%。30代前半で男性の2人に1人、女性の3人に1人は結婚してないわけです。20～30年前に30代半ばの人は、みんな結婚して小さい子どもが何人もいるのが普通でした。今はそれが普通とは言えない時代になってきました。

1990年代後半からどうも社会の基本的なあり方が変化していることは、いろいろなデータから見えてきます。昔から自殺はあったわけですが、1997～1998年にかけて自殺する人が1万人ぐらい増えてしまった。これを見てたまたまかと思ったら、それがずっと続いている。特に中高年の男性の自殺率が増えてしまっているわけです。昨年(2012年)は幸いなことに3万人を切りましたけれども、1997～1998年の間に日本社会を変化させる何か大きな出来事があったらしいというのは、これだけでも分かります。いわゆるアジア金融危機が起こって、大きな生命保険会社、証券会社、銀行でさえも倒産が起きた時期です。1997年までは、大きな会社に就職すれば一生安泰で、退職後も年金をたくさんもらって暮らせるはずと思っている人が多かったのですが、アジア金融危機が起きて、リストラだとか倒産が起こってしまい、そのショックで自殺率が増えたんじゃないかというふうに言われています。

さらに、児童虐待も1998年から増加し、DV、強制わいせつ、セクハラなどに関しても、1990年代後半から突如増えてきました。少年凶悪犯罪はそんなに増えているわけではないけど目立った事件が多くなっています。家族の分野を見ると離婚が急増して、2000年ぐらいまで右肩上がりに増えています。結婚する人も少なくなったので、最近はまだ多少減っていますが、今は3組に1組が離婚するという計算になっています。

その裏側に経済の大きな変化がありました。1997年ぐらいまでは正社員が増え、当時の非正規社員の多くは学生とか自営業の人の出稼ぎとか農家の人の出稼ぎとか主婦のパートで占められていましたが、1998年以降、学校を卒業しても正社員になれないので、アルバイト、契約社員、派遣社員などをして過ごす若い人、いわゆるフリーターが急増していきました。

農業だけではなく漁業もそうですが、自営業中心の社会というのがかつてはありました。戦前は8割ぐらいの人が農業で暮らし先祖代々の農地を耕していくということが中心の社会でした。そういう時は女性も外でたくさん働いていたわけです。女性だからといって家事と育児だけをしていればいいというわけではなく、家事や育児をしながら外で農作業もして働く。男性も農作業をしながら家の用事もする。男性・女性だけではなく、子どもも高齢者も自分のところの農地で働かなければいけない。商店でも町工場でも一家総出で働いた。そういうところでは男女共同参画っていうのは言わなくたって外で働いていたわけです。

戦後、工業社会が出てきました。これは企業社会といってもいいと思います。日本だけ

ではなくアメリカ、ヨーロッパでも、工業化が起きると性役割分業ができます。男性は企業で雇用、女性は家事・育児というような、性別によって活躍する場が違う社会ができてきました。イギリスでは1920年ごろには成人女性の80%以上、アメリカでも1950年ごろは75%が専業主婦でした。日本は1975年に専業主婦率が一番高くなりましたがそれでも60%ぐらい。農業社会では女性は働くという伝統が残っていましたが、アメリカやヨーロッパでは、「男は仕事、女は家事」という分業はもっともっと根深く広く社会の中に広がっていたわけです。しかし、社会は世界的にどんどん変わっていき、「男は仕事、女は家事」ではなかなか通用しなくなってきました。脱工業化とか情報化社会とかグローバル化する社会とかいわれますが、今までのように、会社で物を作って、そこに男が働きに行っただけで物を買ってそれで経済が回るという世の中ではなくなくなってきました。これが社会にさまざまな変化をもたらすことになってくるわけです。

豊かになった社会

家族とは何かということを少し考えてみますと、家族とは自分を必要とし大切にしてくれる関係と言われています。それ以前に人間というものを考えてみても、自分を必要とし大切にしてくれるものがないと、なかなか希望を持って生き生きと生きられないわけです。それがなかなか感じられないとバーチャルにでも求めてしまうものなのです。

中年男性の会社経営者と話をしたときに、「ペットの何々ちゃんをケータイの待ち受け画面にしてるんです。休日は何々ちゃんと一緒に過ごします。車でドッグランに連れてって、天気の良い日は2人でランニングをして川辺に寝そべると『隣に何々ちゃんがいる。おれって幸せなんだな』というふうに思う」と言うのです。

私の同僚が、ジャニーズの追っかけをしているファンの調査というのをやっています。最近では中年女性が親子で追っかけているケースも多いそうです。「息子みたいでかわいい」というそうです。「そうか、なるほど、そうなんだ。だから、その子が幸せだったら私も幸せ」って感じなんですね。これはもう単なるファンというよりも自分の家族の代わりみたいなものですね。つまりバーチャルでもいいから家族が欲しいというエネルギーや、自分を必要とし大切にしてくれる関係が欲しい、実感したいというエネルギーが満ち溢れているわけです。

少し戻りますけども、私が生まれたのは経済が高度成長期だった1957年ですからほとんど高度成長期と私の人生は重なるわけですが、「男は仕事、女は家事」というような意識や実態が広がったのは実はこの時期です。さっき言ったように、戦前は男性も女性も外で家業なんかで働くことが多かったわけです。高度成長期に入って工場ができて、会社ができ、そこで働くサラリーマンが増えるとともに、夫は主に仕事、妻は主に家事で豊かな生活を目指すというような家族が出てきたわけです。

最初のうちは狭いアパートで暮らすとか社宅で暮らして、だんだんとマンションとか一戸建てというふうに右肩上がりでもっと快適な家になっていく。家電製品もそうですね。私が物心ついたときは白黒テレビはありましたが、カラーテレビが家に来たときはもう驚きました。全自動洗濯機が入った。洗濯機で脱水してくれる。電子レンジが来た、クーラーだとかいうふうに、お父さんの給料が右肩上がりでもっと上がったので、それにつれて家電製品を買ったり住宅が広がったり、子どもにも教育をつけさせたりして、どんどん豊かになっていく。その前提は、夫の収入が安定していて上がり続けるという見通しがあったからです。

それがだんだんうまくいかなくなってくるのが1973年ごろからです。徐々に社会が成熟するに従って、夫の収入が思ったように伸びなくなってきたという時代が来たわけです。そうすると2つのことが起こりました。1つは晩婚化です。これは私がパラサイト・シングルということを言い始めたひとつのきっかけです。昔だったら若くて健康な男だったら、結婚もして収入は上がり続けると思えたし、現実にそうだったわけです。しかし、収入があんまり伸びなくなると若い人は収入が高くなるまで親元で待とうという傾向が出てきました。もう1つは、既婚女性がパートで働きだすようになりました。男性の収入は伸びなくなっただけでも、教育費はかかるし住宅ローンも払わなくてははいけない。だから3歳までは子どもを育てるけどそれからはパートに出て収入を補おうという傾向が強まるのがこの頃です。男は仕事、女は家事で豊かな生活を目指すのは基本にあるけれど、それを多少修正した時代です。

社会全体が豊かになったということで、物が売れなくなってしまいました。電化製品に代表されるように物を順番に揃えていくのが豊かな家族の象徴だったのですが、もう揃えきったわけです。揃えた後に何を買えば幸せになるんでしょう。普通の商品を普通に売ったのではなかなか売れない、儲からない社会になってきたわけです。

女性の発想

ではどういう商品が売れるか、どういうもので儲けるのかということ、それはサービスとかプラスアルファがあるような商品でないと売れなくなってきました。

例えば、歯科の治療中に足裏マッサージしてくれるところがありました。なるほどと思いましたね。歯だけ治療したらそれでいいだろうっていうのが男性の考え方なわけです。そうではなくて、患者さんの立場に立って、治療している間にどういうことをすれば気持ちよく治療受けてくれるかと考えたら、この足裏マッサージが浮かんだとその女性の歯医者さんは言っていました。そういう能力には女性のほうがどうも優れているらしい。

男社会の中で、男性の発想はこうです。「電話なんて用事が済めばいいだろう。携帯電話でメールとかメッセージのやりとりをするのは何だ」とかいうわけです。家に電話をかけて「きょう何時に帰る。ガチャ」というような発想です。「メールとか、写真を送る。何だ、それ」といって最初は反対だったんです。それがNTTの松永さんは、「いや電話っていうのはただ単に用事をすませだけのものではない。女性は昔から友だち同士で何かあったらおしゃべりをするとか、関係性をすごく大事にするから、そういう関係性をつなぐために電話を使っている。だから、メールなどでメッセージや写真を送り合うようにすれば、女性たちはたくさん使ってくれるに違いない」といって無理に始めたら、結果的には爆発的に利用されています。

そういう新しくプラスアルファをするような能力がなぜ女性のほうにあるのかということ、女性は小さい頃から相手がどういうことをすれば喜ぶのか考えることを鍛えられているわけです。これはかなわない。新しい経済では女性の能力を活用しないと活性化しないだろうというふうに思いました。

だから、最近では女性が活躍している企業ほど業績は良いというデータが出てきています。誕生日を覚えていてもいなくても別にどっちでもいいだろうっていうのが男性の発想ですね。どんな物であっても誕生日を覚えていてメッセージを伝えれば、自分のことを大切にしてくれたと思うのですが、別に覚えていたからといって1円の得にもなるわけじゃないというのが男性の発想です。これだとなかなか新しい経済は乗り切れないです。

私の担当している学生のここ10年ぐらいの傾向を見てみると、彼女がいる男性は企業の内定率が高い。この裏には多分こういうことが働いているんだと思います。彼女がいて付き合っているということはコミュニケーション能力、つまり相手がどういうことを望んでいるのかということを知覚する能力が高まっているということなのです。女性は女性同士の間の付き合いで相手が何を思っているか、何が欲しいのかを考えないといけないうように訓練されているので、女性が活躍する企業ほど利益が上がっている。

これは企業だけじゃなくって社会全体、国でもそうです。女性管理職比率は、日本は1割ぐらい、欧米の主な国は3~4割ぐらいです。ヨーロッパの中でも低いのはイタリア、スペイン、ギリシャです。また働いてない女性の割合が多いのも、日本、韓国、イタリア、ギリシャ、スペインです。ニュースでご存じのように、これらの国は少子化も進み、財政赤字も大きくなっています。つまり女性が経済界で活用されていない国はどれも経済状況が世界の中で思わしくないというふうに考えられます。

変わりにくい意識

1975年ぐらいから結婚しない人が増えてきて、1995年ぐらいから加速化しています。1970年代は30歳~34歳で結婚してない男性はわずか11.7%、女性は7.2%でしたが、2010年では、同年代で結婚してない男性47.3%、女性34.5%に増えています。特に若い人の中で結婚しない人がどんどん増えている裏側には、男性1人の収入では妻子の豊かな生活を支える見通しが立たないという経済的な大きな変化があるにもかかわらず、なかなか男女共同参画の意識が浸透しないというところに課題があります。

私は最初の授業でいつも学生を脅すわけです。今50歳の人たちの未婚率は男性20%、女性10.6%ですけど、今の20~30歳ぐらいの若い人の生涯未婚率、一生結婚しない割合というのは大体25%と見積もられています。男性はもう少し高く、女性はもう少し低いです。今の若い人の4人に1人は一生未婚。それだけではない。今離婚経験率は大体38%ぐらいです。結婚した人が1回離婚する確率が38%ぐらいあるわけです。もちろん再婚の人も含まれていますが、初婚の人で大体3組の結婚があったら、そのうち1組は離婚するっていうふうに思ったほうがいいでしょう。学生が100人いるとします。社会が今のままならということですが、「君たちのうち25人は一生結婚しないよ。残りの75人のうち約3分の1、25人の人が1回は離婚するよ。つまり今の若い人の中で結婚して離婚しないって人は2人に1人ぐらいしかいないんだよ」というふうに言っても、大概は自分のことじゃないって思いますね。でも現実にはそうなっているわけです。今60歳ぐらいの人がいて、子どもが2人ぐらいいるとすると、確率的には1人は結婚して離婚しないで一生を送るかもしれないけども、もう1人は一生結婚しないで家にとどまり続けるか、離婚して家に戻ってきますから、覚悟してくださいねというふうに言うことにしています。豊かな生活どころではなく、結婚して離婚しない人生さえも今の若い人には、当たり前のもものではなくなってしまっています。

男性1人の収入で妻子の豊かな生活を支える見通しが立たない時代になっている一方で、なかなかその意識が抜けないというのが現実です。調査をしても、やはり結婚後は、主に男性の収入でやってくるのが普通だと答える男性も多いし、女性も多いです。固定的役割分担意識やそれを前提とした制度にこだわる男性と女性がなかなか結婚しにくいわけです。

1992年頃、20代後半で結婚してない男性の8~9割は正社員でした。それが2010年にはなんと大体5~6割になり、残りの3割ぐらいが非正規雇用ということ。また、結婚し

てない女性も大部分は正社員でした。男女雇用機会均等法ができて確かに92年までは正社員率は上がるんですが、以降は男性同様に若い未婚女性の中でも正社員率がどんどん減っていきました。

明治安田生活福祉研究所が2009年にした調査「結婚相手にいくらぐらいの収入を求めるか」で、男性のほぼ6割の人が「こだわらない」と答えています。が、「400万円以上とか600万円以上女性に働いてほしい」という男性も最近は結構増えてきています。今若い未婚の男性で、将来の結婚相手に「一生専業主婦でいてほしい」という人は1割ぐらいにまで減りました。25年ぐらい前は、「妻には一生専業主婦でいてほしい」は約4割あったのですが、それがここ20数年のうちに約1割に減ってしまいました。

一方、女性で専業主婦になりたいという人の割合は約2割でしたが、10年ほど前から変化が見られるようになりました。つまり若い男性は女性に働いてもらわなくてはというふうに思い始めているけれど、若い女性は、「いや専業主婦になれるもんだっとなりたい」と答える人が増えてきました。別にこれは女性が悪いっていうわけじゃないと思います。だって長時間労働ですからね。

日本の男性の長時間労働は有名で、例えば月に50時間以上働く男性の割合をみると日本は先進国の中では最高で約30%ですが、アメリカ約10%、ヨーロッパは約5%ですごく少ないわけです。データを見たときにえっと思ったのは、日本の女性で50時間以上働く人の割合はアメリカやヨーロッパの男性よりも多いんだと分かりました。日本の女性はパートや派遣社員の人が多いですから、女性の平均労働時間は世界の中では低いほうです。でも、日本の女性が50時間以上働く割合は、先進国の中で50時間働く男性の割合よりも多いんですね。平均で語ってはいけないんです。中国人学生がこう言っていました。「日本の労働者って使い放題ですね」つまり日本は一旦正社員とか正職員になると、いろいろな意味で労働者から見れば使われ放題になっているわけです。

男女2人とも週50時間以上働き、使われ放題的な働き方で子ども育てろというのが無理です。だったら辞めて専業主婦になりたいっていうふうに思う女性が増えてもしょうがないと思います。パートで働くと、昇進もないし収入も低い。それならば収入の高い男性をみつけて、せめて夫に400万円以上の収入がないと自分も長時間労働を強いられる可能性があり、それはいやだと思える女性が増えるのは当然なのです。でも現実の男性見てみると、これは全国のデータですが、20歳～40歳までの未婚男性の38.6%がなんと年収200万未満です。200万～400万までが36.3%、東京とか大阪とかそういう結構収入の高いところも全部含めて年収400万以上稼ぐ未婚男性はたった25.1%、4人に1人しかいないわけです。北欧やイギリス、アメリカ、フランスでは男女がともに稼いで豊かな生活を維持することに転換したので少子化に歯止めがかかっています。

ここで私のパラサイト・シングルが出てきます。欧米っていうのは原則として20歳になれば家から追い出されますから、自立するしかない。収入が少なくたって1人で生活するよりも2人で生活したほうが生活できるっていうので同棲とか結婚とかが増えて、子どもの数も結果的に増えています。しかし、日本、イタリア、スペイン、イギリス、韓国のように、結婚するまで親のところにいるのが普通だということでは、親と同居して待てるので、収入が安定しないと結婚しないという人たちが男女とも増えています。だから、いろいろな意味で男女共同参画が今必要になっているわけです。今「男は仕事、女は家庭」というような固定的な役割分業が男性にとって重荷になってきています。

男女共同参画っていうのはただ単に女性を引き上げ、女性を活躍できるようにしようと

いうだけではなく、それは日本社会や男性のためにもとてもプラスなわけです。つまり今は経済が変わり、「稼ぐ」という役割をなかなか果たしにくい男性が増えてきている。自分が一家の大黒柱だからと無理して働いて過労死してしまうとか、そういう男性が希望を失ってきているわけです。中高年の自殺もそうです。欧米では「失業したことでなぜ自殺しなくてはいけないのか」というんです。日本では「やっぱり男は稼がなきゃ一人前じゃない。稼げなくなった。もうおれは駄目だ」ということで自殺する人が1998年に増えたんじゃないかと思っています。ひきこもりとか不登校が女性じゃなくて男性に多いのも、ちゃんと学校に行ったらちゃんと稼がなければ男として失格っていうような意識が強いから、そういうプレッシャーに負ける人がいるわけです。

離婚を調査したときにも、男性の収入が減ったり、事業に失敗したり、失業したから、女性が子どもを連れて実家に帰ったっていうケースをたくさん見ました。別れた夫への不満の中で一番多かったのは、収入が少なかったことでした。「愛想が尽きた」「かわいそう」「そんな男性は魅力がない」というけれど、結局「男は稼がなくてはいけない」という意識が男性にも女性にも強い。だから稼げる状況ではなくなったときにさまざまな社会問題が起きてくる。男性は強いもの、たくさん稼いで当たり前というようなプレッシャーはもう限界に達しているのです。

今後の展望

今後も、結婚できない男性、女性が増えていくし、若い世代ではそろそろ頭打ちですが、今増えているのは中高年の親同居未婚者です。2012年で35歳～44歳までで親と同居している人が日本全国で305万人。もう7人に1人ぐらいになってしまっている。これがすべて問題だというわけではないのですが、中年の親同居未婚者にはやはり失業者とか非正規雇用者が多いわけです。親の年金で生活している中年の未婚者がたくさん出てきてしまっている。親が死んだことを隠して年金をもらい続けるというような事件が摘発されるようになったのもこういう状況があるからです。さらに今、同居の未婚の息子による高齢者虐待として通報されることが多くなっているのは、今まで、家事とか人の世話なんかしたことない人が、親が弱くなったときに何をしたいのか分からないというのも原因です。

結局、夫婦二人で無理せずに共働きできる条件を整備する必要に迫られています。結婚してない人の大部分は、経済的に子どもを育てる見通しがつけば、結婚もして子どもも持ちたいと思っています。だから子どもを育てながら働ける環境の整備や性別役割を柔軟にしていく必要があります。

別に専業主婦でも主夫でもいいし、共働きでもいいし、それを柔軟に状況に応じて選べれば一番いい。今は正社員だと長時間労働が当たり前、家に専業主婦か母親がいることが当たり前の働き方、世界の中で長時間労働が最も多い。一方で非正規社員は昇進、昇給ほとんどない、使われ放題の長時間労働。どっちかしか選べないっていうようなシステムが問題です。長時間労働を削減して、正規社員・非正規社員の就労の格差を是正して、男女ともに家庭を支え合うっていうようなシステムに転換すれば、この少子化の流れというのは逆転して、日本はまた活性化する。日本社会というのはまた復活して、成長していくのではないかというふうな思いで講演をいろいろなところでしている次第です。